有田陶器市と募金活動

初めて電車で陶器市に行ってきた。４月２０日に九州山口陶磁展二部の審査をした後に今右衛門さんのお店を訪ねた。

その折、１３代夫人の泰子さんから「陶器市のときに佐大生がお店の前で募金をするのよ。見に来てご覧」と言われた。アバンセで働いていた頃、財団の理事をしていただいていた関係で、有田に行った時はお邪魔をさせてもらっている。

有田駅を出た途端、ああ多くの観光客が来るはずだ。どう頑張ってもこのイベントは有田でしかできないと思った。

ともかく、今右衛門さんのお店までは脇見をしないでと、自分に言い聞かせ歩いた。車だとすぐの道も歩くと遠い。上有田で大勢の人が降りたが、それが正解だったのだろうかなどと悔んでいるうちに、ようやく見慣れた看板が目に入ってきた。やれやれ。

お店の前では募金箱を持った学生達。まずはお店に入って泰子さんにお礼とご挨拶。「声が小さいので、そんなことでは募金が集まらないよと言ったところ」と、いつもの元気な言葉。外に出たところで「ようやく大きな声になった」と合格点。一人ひとりの募金箱にお金をいれる。お店の向かい側は工房だが、その軒先でも青いシートを敷き、バザーの品物を並べて売っている。その間、学生達は一生懸命、声をあげている。再びお店に入って、ご当代の１４代今右衛門さんと話をした。これまでも、よそでは聞けない、何代も続く日本文化の家らしい話を聞かせていただいていたが、その日は「私には、この家がいろいろなことを教えてくれている」と今右衛門さんは話し出した。「家」は古い建物が持つ様々なものだろうと思いながら話しを聞いた。そのうち、次の世代に日本の文化をどのように伝えていくかという話になり、文化を理解するには幅広い「教養」が必要だということになった。

帰り際「北島さん、地べたに直接座っているのはどうも、机を用意した方がいいかもしれません」と遠慮がちに言われた。バザーもそうだが、見るとお店の隣の今右衛門美術館の前でも座わりこんで昼食の弁当を食べている。「陶器市に来てご覧」の発端は「将来の国のエリート官僚達の卵が日本文化を研修するために新人研修に来るのよ。今時の若者はマナーがなっていない」という泰子さんの話から始まって「佐大生が募金をするので来てご覧」となった次第である。

貸してくださる軒にふさわしい、学生達の態度が求められていたのかもしれない。

今右衛門さんは、本学文化教育学部の客員教授として隔年学生の指導も行っていただい

ている。

夏には今右衛門さんと作家京極夏彦さんが参加するシンポジウムが大学主催で行われる。京極ワールドと言われる独特の小説を書く作家との対談は楽しみである。

大勢の人で賑う有田陶器市

陶器市で募金活動をする佐大生ら